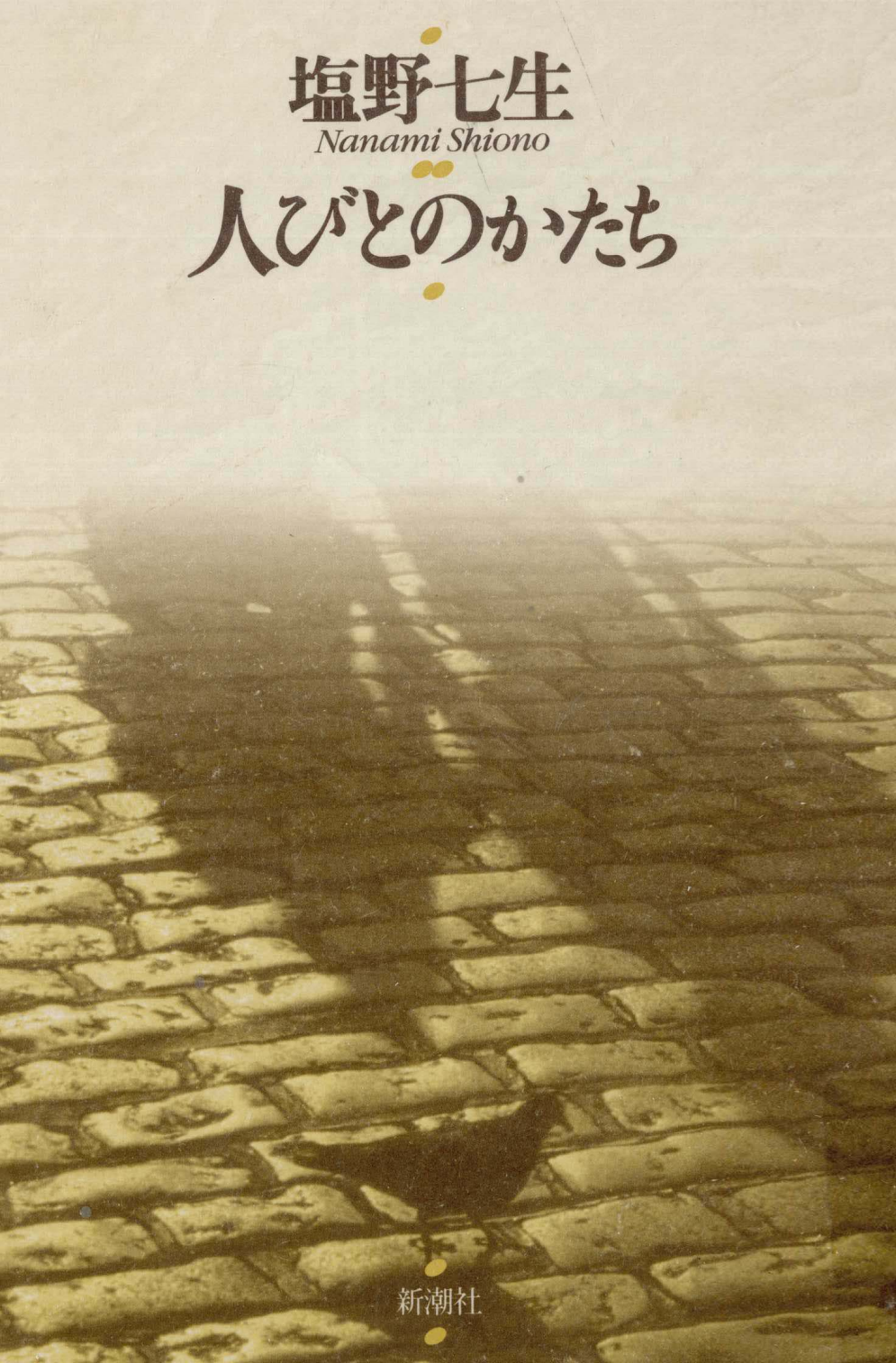
塩野七生

Nanami Shiono

人びとのかたち



新潮社

塩野七生

Nanami Shiono

人びとのかたち

新潮社

塩野七生（しおの・ななみ）

1937年7月，東京に生れる。学習院大学文学部哲学科卒業後，1963年～68年にかけてイタリアに遊びつつ，学んだ。1968年より執筆活動を始め「ルネサンスの女たち」を「中央公論」誌に発表。初めての書下ろし長編『チェーザレ・ボルジアあるいは優雅なる冷酷』により，1970年度毎日出版文化賞を受賞。この年よりイタリアに住む。1982年，『海の都の物語』により，サントリー学芸賞を受賞，翌83年，これまでの作品活動に対して菊池寛賞を受賞した。著作は20冊を越える。1992年より，ローマ帝国興亡の一千年を描く「ローマ人の物語」にとりくみ，一年に一作ずつ書下ろす予定。1993年，『ローマ人の物語Ⅰ』により，新潮学芸賞を受賞。

人びとのかたち

一九九五年一月三〇日　発行

著　者　塩野七生

発行者　佐藤亮一

発行所　株式会社新潮社

東京都新宿区矢来町七一

郵便番号一六二

電話（営業部）03―三二六六―五一一一

（編集部）03―三二六六―五四三四

振替東京四―八〇八

印刷　錦明印刷株式会社

製本　加藤製本株式会社

価格はカバーに表示してあります。

© Nanami Shiono
1995, Printed in Japan

¥1500

乱丁・落丁本は，ご面倒ですが小社読者係宛お送り下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

ISBN4-10-309625-X C0095

人びとのかたち＊目次

おとなの純愛　9
せめて月の輝く夜には　14
スター　19
戦時のリーダー　24
デザイン・フォー・リヴィング　29
人間嫌い　34
男女の友情　39
不　倫　44
学校教育　54
ジゴロ　60

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

戦　争　66
「士」であること　71
失われし時を求めて　77
正義について　82
女の恋　88
差別について　94
反省という行為　100
悪　女　106
安眠剤　111
自由な女　117

言葉について　123
夢を見ること　128
エピキュリアンのすすめ　134
遊びごころ　139
舞踏会の手帖　144
パワーと品格と　150
官　能　156
優しい関係　162
罪と罰　167
イタリア男の夢　172

ライジング・サンその後 178
住まいについて 183
地中海 189
女の生き方 195
嘘と真実 201
作家の描く作家像 207
失業 212
聞き上手 217
八月の鯨 223
映像の限界 229

誰もわかってくれない　234
生と死と生　239
単純明快なヒーローたち　244
余暇の善用　249
親子の対話　254
天　才　260
偉大なる平凡　266
本書に登場する映画　278

人びとのかたち

映画鑑賞を読書と同列において
私を育ててくれた
今は亡き父と母に捧げる

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

おとなの純愛

エヴァ・ガードナーが死んだ。

新聞記事風に書くと、こんな具合になるだろう。

――一九二二年、ノースカロライナに生る。一九五〇年代のハリウッドに最高の美女として君臨。結婚歴はフランク・シナトラを最後に三回。他にイタリアの美男俳優、スペインの闘牛士など、恋愛歴も華やか。

主な出演作『ショウボート』'51、『キリマンジャロの雪』'52、『モガンボ』'53、『裸足の伯爵夫人』'54、『陽はまた昇る』'57、『裸のマヤ』'59、『渚にて』'59、『北京の55日』'63、『うたかたの恋』'69、『ロイ・ビーン』'72。

晩年は一人ロンドンに住む。死因は肺炎。六十七歳だった――

しかし私は、エヴァ・ガードナー死去の報をテレビニュースで見ながら、二本の映画を思い出していた。

一本は一九四〇年製作の『西部の男』。監督はウィリアム・ワイラーで、ゲイリー・クーパーとウォルター・ブレナン出演の白黒映画だ。

二本目は『ロイ・ビーン』。一九七二年製作で監督はジョン・ヒューストン。主演はポール・

ニューマンだが、まさに象徴的なかたちでエヴァ・ガードナーが出演している。こちらはカラー作品。

この二本に共通しているのは、アメリカ史上実在の人物であったらしいロイ・ビーンをとりあげているところである。とはいえ二本目は一本目のリメイクではない。ロイ・ビーン物としてならば、二本目のほうが正統派だ。

では、ロイ・ビーンとはどんな男であったのか。手短かに話すと、自らも無法者のくせに、あるときから勝手に判事と名のり、テキサス州の法律書は読みはしなくても常に手許におき、それに誓っては彼に従う者以外の無法者はことごとく縛り首にするという〝無法〟によって、テキサス一帯になにやら不可思議なる秩序をうち立てた人物、ということになる。

このような男では、いかに大監督ワイラーとて、アメリカの良心クーパーに演じさせるわけにはいかず、また適役でなかったと思うが、それでこの映画でのロイ・ビーン役はウォルター・ブレナンである。クーパー演ずるのは、この無法判事の愉快な友人で、最後はロイ・ビーンと対決するという役どころ。

しかし、ヒューストン作の映画では、この無法判事はポール・ニューマンが演ずることからしても主役だ。そしてワイラー作のロイ・ビーンは、悪役でも愛すべきという形容詞が必要な悪役だが、ヒューストン作となるとこれは徹底している。

このロイ・ビーンを愛すべき悪役にした最大の要因は、ミス・リリーに捧げたなんともひたむきな純愛にあった。

ミス・リリーとは、歌姫である。相当な有名人であったらしい。ヨーロッパ巡業中に英国皇太

子の前で歌ったとか、またアメリカ巡業では大都市でしか歌わず、それも前売り完売が常であったとかで、一時は国際的なスターであったのだろう。ヒューストンの『ロイ・ビーン』では、テキサスの田舎者ゆえに前売券購入まで頭がまわらず、フロックに身を正して行ったものの入場できなかったというエピソードまで紹介されている。

無法判事は、会ったこともなければ歌を聴いたことさえない歌姫に惚れたのだ。ただ単にポスターの写真を見たというだけで。

判事ロイ・ビーンの法廷兼酒場の壁という壁はミス・リリーのポスターで埋まり、酔払って彼女（の写真）を侮辱した男はその場でピストルでバン。法廷兼酒場の名もミス・リリーで、元悪漢のシェリフたちが宣誓をする際の言葉も、法とミス・リリーの名において、という有様。判事ロイ・ビーンの〝治安〟のおよぶ、その辺一帯もミス・リリー州。

エヴァ・ガードナー

ヒューストン作の映画では、この無法判事の法廷を飾るミス・リリーのポスターが映しだされるや、見ていた観客の頬は思わずゆるんだにちがいない。ポスターの顔はいずれも、最盛期のエヴァ・ガードナーであったから。

絶世の美女とはこの女かと思うほどの圧倒的な美貌。高貴でいて優雅な肉体の

線。下品では少しもないのに、それでいて挑んでくるような野性味あふれる切れ長の眼。
これがどこにでもいそうな美女であったり可憐なタイプの女であったりしたら、判事ロイ・ビーンの純愛とて存在理由を薄弱にしたであろう。エヴァ・ガードナーを得て、この映画は活きたのだ。ワイラーの『西部の男』でのミス・リリーは、美女は美女でも圧倒的な美女ではないが、こちらのロイ・ビーンは脇役なのだからしかたない。
それでもワイラーは、この一見こっけいな純愛をあたたかく描いている。この無法判事を倒した正義の男クーパーは、ブレナン扮する瀕死のロイ・ビーンを腕にかかえて、ミス・リリーに会わせるために彼女の楽屋に連れていくのだ。愛すべき悪役は、最愛の女に一目会えた幸せを満喫しながら死んでいく。
ジョン・ヒューストンのほうは、会わせもしない。だが、ロイ・ビーンが死んでしばらくして、偶然にミス・リリーは、今ではミス・リリー博物館と名を変えたかつての法廷兼酒場に立ち寄る。ここでようやくエヴァ・ガードナーの登場だ。一世を風靡した絶世の美女も、歳は争えない。重みもいくぶんか増し、おだやかに老いはじめている。もしかしたら歌手としてのキャリアも下り坂で、地方巡業の途次であったのかもしれない。
壁一面に張りめぐらされた今では色の褪せたポスターの自分には彼女も驚くが、判事は返事をもらえなくても手紙は送りつづけていたから、思い出しさえすれば目新らしいことではない。あの変なファンとはこの男だったのか、という想いぐらいはいだいたのだ。
しかし、唯一送られなかったという判事の手紙が差し出され、それを読みはじめるや彼女の表情は変っていく。

「親愛なるミス・リリー、最後の手紙を書くためにペンをとります。

貴女には会ったこともなく声も聴いたこともないわたしだったが、胸の中には常に貴女がいたことを告げたかった。この地上に貴女が存在しているという一事だけが、わたしに、ジェントルマンになるための誇りと力を与えたのだった。ポスターの上の貴女のイメージが、長く孤独な夜の寒さをどれほどやわらげてくれたことか。

貴女に愛を捧げつづけたことは、わたしにとっては名誉と呼ぶしかないものだった。もはや別れを告げねばならないときが来たが、この世であったと同じようにあの世でも、貴女の放つ光がわたしを導いてくれると信じている。そして、どこにいようとも永遠に、貴女の熱烈な賛美者で守護者であると言えるよう願いながら……。判事ロイ・ビーン」

ヒューストン作の『ロイ・ビーン』は、手紙を読み終えたミス・リリーの、読む前とはうって変ってやさしい想いに満ちあふれた幸せな表情を大うつしにして終る。私には、ロイ・ビーンの純愛への感動は別にして、これはジョン・ヒューストン監督の、女優エヴァ・ガードナーへのオマージュに思えてしかたがなかった。

男に心から愛された経験をもつ女は一生孤独に苦しむことはない、と言ったのは詩人のリルケだったが、心から女を愛した経験をもった男の場合も、同じであるのかもしれない。

せめて月の輝く夜には

光り輝く満月は人の心をまどわすという、伝説がヨーロッパにはある。ヨーロッパも北だと、満月の夜には男は狼に変身する。それが南欧になると、雲一つない夜空に君臨する月からの光りを浴びて、女は、いつもならばしてはいけないことをするように変るというのだ。

北ヨーロッパの女たちへの満月の影響については聞きもらした。野獣化した男の犠牲になるのか。それとも、あるイギリス映画が描いていたように、自分の意に反して満月の夜がめぐってくるたびに狼に変身してしまう男に、人間の心をよみがえらせる役割であったか。

南ヨーロッパでは、しかし男は、幻惑状態にある女を正気にもどす努力をするわけではない。月の光りを浴びていつもの自分でなくなってしまった女に、男のほうも同調してあげるところが南欧的だ。なに、満月とて永遠不動ではないのである。翌日から欠けはじめる。女の幻惑状態も、それにつれて薄れていくだろう。月が満ちているその夜くらい女の夢に付きあってやったって、と思ってのことかもしれない。

それに、狼に変身した男の場合は血を見ないではすまないが、幻惑された女ではその心配もない。周囲に迷惑をかける度合だって格段にちがう。南では、なにごとも優しく人間的に変るということか。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com